原　著

実践上の課題解決を目指した保健師の研究への看護系大学教員による支援方法の特徴

石　丸　美　奈（千葉大学大学院看護学研究科）
安　田　貴恵子（長野県看護大学）
山　崎　洋　子（山梨大学医学部看護学科）
井　手　知恵子（大分大学医学部看護学科）

本研究の目的は，実践上の課題解決となり，ひいては保健師の専門職としての成長につながる研究的取り組みとなる看護系大学教員の支援方法の特徴を明らかにすることである。

保健師の研究的取り組みを支援した経験があり，保健師および保健活動上の成果を感じている看護系大学教員９名を対象に，半構造的インタビューによりデータ収集し，６名から語られた９事例を質的に分析した。

保健師の研究的取り組みに対する教員の支援方法は，４つの段階と全体のプロセスを通じて，50カテゴリが抽出された。内訳は，開始に至る段階は，「保健師が推測していることを確かめてみるよう勧める」など，計画の段階は，「保健師の思いや活動状況を深く知ることをしながら研究として何に焦点をあてるのかを保健師と共に検討する」などがあった。実施の段階は，「職場としてこの研究的取り組みの必要性について学習の機会をつくる」など，現場への還元の段階は，「研究的取り組みの結果を実践に適用できるように，外部の支援者の立場を利用して内部の人々に働きかける」などがあった。また，全体のプロセスを通じて，「研究のプロセスを通して，今後の活動への意欲をもてるよう心がける」などがあった。

以上より，１）実践上の課題解決に向けて，より良い看護実践となることを意識して科学的方法を用い，研究と実践活動の循環を促し，実践の質の向上を導く，２）現場にある豊かなデータを言語化し，その意味を見いだせるよう検討を深める，３）保健師の個別性を重視する，４）外部資源者のメリットを活かして職場の協力を求め，取り組みの共有化を図る，５）科学的方法の質を保証することが支援の特徴として考察された。

KEY WORDS：Research Support，Nursing Faculty，Practice-Based Research

Ⅰ．はじめに

地域における保健活動の基盤となる制度の導入や対策の整備等，保健師の活動をめぐる状況は大きく変化している[1)]。地域において保健師が保健活動を行うにあたっては，保健師の果たすべき役割を認識した上で，住民，世帯及び地域の健康課題を主体的に捉えた活動の展開が求められている[2)]。

このような状況において，「保健師助産師看護師法」「看護師等の人材確保の促進に関する法律」が改正され，保健師においても現任教育の重要性が唱われ，就業年数に応じた人材育成ガイドライン[3)4)]が作成されるなど，保健師の現任教育の推進方法が課題となっている。

この保健師の現任教育を推進する一つの方法として，「研究的取り組み」があると考える。「研究的取り組み」を行うことは，保健師の目指す地域の健康課題解決を追求しながら，保健師の専門職としての人材育成を推進する現任教育として意味があり[5)]，筆者らは，大学の教育研究者（以下，教員とする）の使命として，保健師の研究的取り組みの支援方法を模索している。

「研究的取り組み」という用語を用いたのは，次の理由による。看護研究とは，直接的間接的に看護実践に影響を与える既存の知を検証および精錬し，またそのような影響を与える知を創生する科学的なプロセスと定義される[6)]。しかし，臨床における看護研究は，学問領域でいわれるところの研究とは異なる目的をもって実施され，主たる目的はスタッフ教育であり，臨床看護研究は，継続教育としての意味合いが強いと考えられている[7)]。保健師が現場で行う研究も同様に，学問領域でいわれる研究と違いがあると考えたことが一つにある。また，看護研究はさまざまな科学的研究法を強力に応用する必要があり[8)]，問題解決的アプローチとは異なる[9)]。実践の場

受理：平成25年９月３日　Accepted : 12. 12. 2013

において，科学的研究法を厳密に行うのは難しいと考えたこと，また，保健師が課題解決のために意図的，探索的に実践に取り組み，看護実践の質の向上にもなっているが，研究のように公表が前提でないことも理由である。

「研究」,「研究的取り組み」のいずれであろうと，臨床（現場）で看護職自らが研究を行うことは意義がある。看護者の倫理綱領（日本看護協会）に示されているように，主体的に研究に取り組むことは，専門職業人としての責務である。それは，看護研究は，実践活動の根拠となる知識体系の構築，実践活動の質の向上，専門職としての成長に対して意義をもち[10]，また，個人や組織の学習としての価値がある[11) 12)] からである。

行政分野に所属する保健師が，保健師としての実践を追究するにも，実践の根拠（事業の必要性や有効性）を所属組織内外の関係者に示し，理解を得ることが重要であり，そのためには，研究的な取り組みが必要である[13]。

このように，実践における看護職による研究の意義は明確であるが課題は多く，過去29年間（1983－2011年）の臨床看護研究に関する文献検討により，多くの看護師が看護研究の目的や意義を認識はしているものの，研究に取り組む姿勢はほとんど受動的であること，その理由として「時間的負担」「研究の知識・技術不足」「支援体制・研究環境の不備」などの取り組み上の課題があり，過去29年間大きな変化はなかったと報告されている[14]。

看護研究の支援については，看護部内の研究委員会の設置，看護管理者による業務調整等の組織的な支援，専門看護師など院内資源の活用，大学等の教育機関との連携などの工夫がされていた[15]。

特に，近年では，看護系大学の増加に伴い，臨床と大学の連携が進み，院内指導者の育成，外部講師の確保，研究資源（図書・文献等）の利用等が報告されている[16]。

実践の場での保健師の研究については，「業務研究」が「臨床看護研究」に該当すると考えるが，課題としては，「時間の確保」「研究の負担や偏りの減少」[17] など看護師と同様であり，業務研究の促進要因として所内外のサポートがあること[18] が報告されている。しかしながら，看護系大学の教員が具体的にどのように支援をするとよいかについては，ほとんど明らかにされてはいない。

そこで，保健師の研究的取り組みを支援した実績のある教員の具体的な支援内容を明らかにしたならば，実践上の課題解決につながる研究的取り組みの支援方法が導けると考えた。この前提としては，研究的取り組みは本人が主体的に取り組むものであり，支援は本人の主体性を尊重したものであるということである。

以上より，本研究では，保健師が行った研究的取り組みのプロセスにそって，看護系大学教員がどのように支援したかを調べることにより，実践上の課題解決，ひいては，保健師の専門職としての成長につながる研究的取り組みとなるための看護系大学教員による支援方法の特徴を明らかにする。

Ⅱ．研究枠組み

保健師が実践上の課題解決に向けて行う研究的取り組みに対する看護系大学教員の支援を研究対象とする。宮﨑が述べるように，研究と実践活動との間には絶えず循環が生まれる[19]。研究的取り組みは，実践上の課題解決を図るプロセスであり，課題は実践から取り出され，その成果は実践に還元される。これらを，科学的方法を用いて行う。研究的取り組みへの動機は様々であっても，取り組む主体は保健師である。また，実践上の課題解決のためには，保健師が所属する組織の了解が欠かせない。したがって，教員の支援は，保健師自身に向けられたものと，組織に向けられたものを含む。

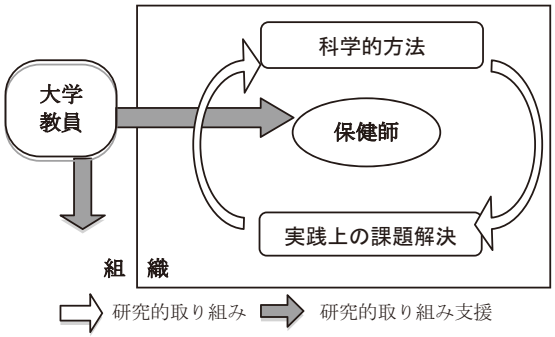

図１　研究の枠組み

Ⅲ．用語の定義

保健師：都道府県，市町村の行政分野に所属する保健師。

研究的取り組み：保健師が，実践上の課題解決に向けて組織の了解の下で行う取り組み。科学的方法を用いるが，実践の場という特性から厳密でない場合もある。取り組みを通して，保健師の専門職としての成長も期待される。成果の公表を前提にはしないが，本研究では研究的取り組みとして妥当であるか確認するために，学会抄録や報告書等の成果物があり，内容を確認できるものとする。

実践上の課題解決：保健師が実践上直面する課題に対して行う活動の目指すところ。

科学的方法：客観的な手法を用い，実際の観察や系統だった分析に裏付けされた方法。

大学教員：大学の教育研究者。本研究では，保健師の研究的取り組みを支援する看護系大学の看護学教育研究者。

研究的取り組みの支援：大学の教育，研究，地域貢献活動の一環として，研究的取り組みに対して，保健師の主体的な取り組み姿勢の保持を第一義にして，大学教員が行う相談や助言等による支え，およびその思いや期待。

Ⅳ．方　法

１．対　象

保健師の研究的取り組みを支援した経験があり，何らかの支援の成果（保健師の活動の充実，保健師の専門性が向上等）を感じている看護系大学の教員９名。研究者間のネットワークを用いて候補者を選定し，研究協力の同意が得られた者を対象者とした。

２．調査方法

インタビューガイドにそって研究者１名により半構成的面接を行った。インタビューガイドに含まれた調査項目は，支援事例における保健師の課題の概要，支援の概要，支援体制，支援において判断したこと，教員として心がけたこと有効と思った支援方法，成果として捉えていることであった。支援事例毎に，支援の過程がわかるように，支援のきっかけや状況，判断・心がけたこと，支援したことなど順を追って語ってもらった。面接時間は，１時間から１時間30分であった。インタビュー内容は承諾を得てメモ及び録音をした。調査期間は，2011年２月～2012年３月であった。

３．分析方法

分析する事例の選定条件は，保健師の取り組みの主体性を保持している，組織の了解が得られている，支援のプロセスが明瞭である，実践上の課題が解決の方向にあることとした。

録音したデータから逐語録を作成し，インタビューガイドにそって整理した。語尾や接続詞で，繰り返しや欠落している部分を修正した。その段階で，対象者に内容が正しいかを確認してもらい，追加があれば追記してもらうように依頼した。これを元データとした。

語られた支援事例毎に，まず個別分析をした。事例毎に，研究のプロセスにそって，保健師はどのように研究的取り組みを進めたか，それに対して教員はどのように支援したかを，教員の支援に対する保健師の反応も含めて整理した。そして，教員は実践上の課題解決をどのように支援したか，また，どのような科学的方法を用いて支援したかという問いをかけながら，端的な表現となるように要約し，研究のプロセスにそって支援方法を整理した。そして，全体分析として，全事例について研究のプロセス毎に教員の研究的取り組みの支援方法を集約し，内容の類似性により分類整理し，カテゴリ化した。

４．信頼性・妥当性の確保

事例の適切性を確保するために，データと成果物を読み，事例の選定条件に合致すると筆者らが判断したものを分析対象とした。分析対象とするデータの正確性を高めるために，対象者に記録内容に誤りがないかを確認してもらい，また，データの信用性を高める[20]ために，筆頭者が行った分析結果について共著者の確認を得た。

５．倫理的配慮

対象者には，調査前に，調査の趣旨および，調査協力は自由意思に基づくこと，個人が特定されないこと等の倫理的配慮を口頭および文書で説明し，署名により承諾を得た。なお，本研究計画は筆頭者の前任大学にて倫理審査の承認を得た。

Ⅴ．結　果

１．事例の概要

事例の概要を表１に示す。データは９名の教員から12事例が収集された。分析事例の選定条件を満たしていないものを除き，６名の教員の９事例を分析対象とした。

教員６名の内訳は，教授５名，准教授１名であった。

保健師が目指した実践上の課題解決は，対象集団の特性に合わせた支援方法の開発（事例E－1，F－1，F－2），保健師の支援の検証（事例C－1，D），保健師の支援・事業の評価（事例B，C－2，E－2），人材育成の方法の開発（事例A）であった。

研究的取り組みで用いた科学的方法は，データ収集方法（事例Aのブレーンストーミング，事例E－1の半構成的面接，事例E－2の自記式質問紙調査）や分析方法（全事例）であり，取り組み期間は６ヶ月～２年間であった。

２．保健師の研究的取り組みに対する教員の支援方法

保健師の研究的取り組みに対する教員の支援方法は，開始に至る段階，計画の段階，実施の段階，現場への還元の段階に分けられ，計画と実施の段階は，さらに各々４つの段階に分けられた。これらの段階と全体のプロセスを通じて，教員の支援方法は50カテゴリが抽出された。以下に，段階毎の教員の支援方法についてカテゴリを用いて示す。なおカテゴリは「　」で表す。

１）開始に至る段階

「保健師が推測していること，疑問に思っていることについて，確かめてみることを勧める」ことを行い，

表１　事例の概要

	事例Ａ	事例Ｂ	事例Ｃ－１	事例Ｃ－２	事例Ｄ	事例Ｅ－１*	事例Ｅ－２*	事例Ｆ－１	事例Ｆ－２
職位・所属大学	教授・ａ	教授・ｂ	准教授・ｃ		教授・ｃ	教授・ｄ		教授・ｅ	
保健師が目指した実践上の課題解決	新任期を育てるための中堅期が育っていない。特にマインドを育てたい	約10年間継続し，市民から好評で保健師としても手応えをもつ事業があるが，今後も継続していくには，事業評価が必要	ALS患者に対する意思伝達装置導入時の関わりに課題が残ったので，どういうタイミングに導入するとよいのか明確にしたい	幼児歯科健診の受診回数が多いほど保健行動がとれているようなので，健診に多く参加してもらうにはどうしたらよいか考えたい	社会的対応が乏しい特定疾患の事例だが，自保健所では積極的，長期に関わっているので，先駆的な支援事例として他の保健師に提示したい	住民がさらに主体的，継続的に町の健康増進計画の推進に取り組んでいくための保健師の関わりを考えたい	保健師が新生児の全数訪問をしているが，４ヶ月の時点で育児不安が解消できていたわけではなかった。育児不安解消できるような家庭訪問にしたい	壮年期で介護保険の申請をする人が増えて来て，予防する手立てはなかったのかを探りたいと思った	事例Ｆ－1の結果，介護保険新規認定者の経緯を調べると，リスクを把握していたものの，対応なく過ぎていたことが分かり，予防的に関われないかと考えた
組織の了解の状況	職能団体の調査研究事業に組織として名乗りをあげた	市の管理職保健師とその管内保健所の管理職の問題意識から始まり，その了解のもと進められた	上司の了解もあった上で保健師職能の業務研究事業に参加した	上司の了解もあった上で保健師職能の業務研究事業に参加した	上司の了解もあった上で保健師職能の業務研究事業に参加した	職場の人と一緒に職場の課題解決のための研究遂行が条件である	職場の人と一緒に職場の課題解決のための研究遂行が条件である	上司の了解あり。一人職場であるので，同様の業務をもつ担当者の連絡会でも，検討した	左記（事例Ｆ－1）に同じ
用いた科学的方法	中堅期保健師がブレーンストーミングにより，後輩に伝えたいことをかき出し，KJ法にてまとめた	長年実施している思春期教室の評価をするために，思春期教室受講終了直後に受講者が記載した感想文を内容の性質により分析した	保健所保健師が意思伝達装置の導入を支援したALS患者の支援記録を，課題，支援内容，結果の観点で分析した	幼児健診受診者を対象に，う歯の保有率を調べ，食習慣と歯磨き行動の変化について月齢をおって分析した	保健所で支援を実施している多系統萎縮症療養者における支援記録を，看護問題，支援内容，結果の観点で分析した	健康増進計画の策定・推進に参加した住民に半構成的面接を行い，結果の分析により主体性と要因の関連をみた	一定の時期に，市の保健師等が標準的な方法で家庭訪問を行い，自記式質問紙調査により訪問前後で変化を比較した	町の新規介護保険認定申請者で脳卒中が主原因の壮年期等の生活状況，支援状況，レセプト情報を整理し，介護予防の観点から分析した	町の新規介護認定者で脳卒中が主原因の壮年期等の記録整理と聴き取り調査により，事例毎に発症以前から要介護認定までの経過を整理した
研究的取り組みの成果	中堅期保健師の人材育成策を具体的に職場に提案できた	学会発表の復命により，保健師の役割を市職員にアピールできた保健師の自己効力感が上がり，事業を工夫して行く思いが強くなった	意思伝達装置の導入において重要な支援を保健師が確認できた。職場の中でも共有された	研究結果から，歯科健診の回数を増やすのではなく内容を充実させようという事業の方向性が明確になった	全事例に共通した必要な支援が導けた保健師の自己効力感が高まった。全国規模の学会の発表につながった	健康増進計画検討会議に，結果から導いたプログラムを取り入れた。実践を良くしようという気持ちが高まった	現場の課題を研究にしていく過程が学べた。訪問の質を見直す機会になった	研究への関心が高まり保健師が大学院に入学した。軽度の患者のニーズ調査の必要性に気づき，引き続き調査に取り組んだ	記録の改善につながり，事例のフェイスシートを地域で統一していくことになった。家庭訪問における保健師の視点が明確になった
研究期間	９ヶ月	８ヶ月	６ヶ月	６ヶ月	６ヶ月	２年間	２年間	１年間	１年６ヶ月
インタビュー時間	１時間15分	１時間15分	１時間15分		１時間15分	１時間30分		１時間30分	

＊事例Ｅ－１，Ｅ－２は，社会人大学院プログラムではあるが，現場の人が研究の種を持って入学してきて，それを研究とすることが条件であり，職場の課題解決を目指したものなので，本研究の対象に加えた。

「先行研究の結果から導かれた活動方法について，意図的に試行することを支持する」のように開始の段階から，研究から得た知見を実践に適用することを支援していた。また，「先行研究の結果から導かれた活動方法について，研究を通して追究することを提案する」のように研究から得られた知見をさらに発展させることを促していた。

２）計画の段階

(1)　実践上の課題から研究課題に転化し明確化する段階

「保健師の思いや活動状況を深く知ることをしながら研究として何に焦点をあてるのかを保健師と共に検討する」「調査可能な方法を視野にいれながら，研究として何に焦点をあてるのかを保健師と共に検討する」のように，どのような事象を綿密に見ていくのか，教員は実践の中から保健師と共に検討していた。これに加え，大学という外部資源の活用として「面接の機会に大学の図書館を利用するよう促す」「研究課題を明確にする上で，文献検討をするようすすめる」ことをしており，既存の知見もふまえた上で，研究課題の明確化を支援していた。そして，「研究のプロセスが自身の活動を評価することになる

よう助言する」等，取り組みプロセスが，保健師自身の援助の振り返りと評価になるよう支援をしていた。

⑵　研究方法の模索と決定の段階

「本人の思いや事業の実施状況について深く知ることをしながら，収集（確認）すべきデータは何かを保健師と共に検討する」「現場にある豊かなデータから，何を結果として示していくか助言する」など，現場の状況の理解に努め，実践を十分に言語化した研究となるよう支援していた。また，「保健師個々の課題にあわせて，研究の方向性を見通して助言する」「保健師にかかる負荷や意欲もふまえ，分析事例数を決定する」など，保健師の意欲，負担感等個別性にあわせて支援していた。

⑶　研究意義の明確化の段階

「個々の保健師にあわせたやり方で，文献検索や文献検討を支援する」ことをしていた。

⑷　倫理的配慮の確認の段階

「研究の倫理的配慮について事務方上司の理解を得られるよう規定を確認しあう」ことをしていた。これは，事例Ｆ－2で大学との共同研究となった時に，研究で用いる個人情報の取り扱いについて，事務方上司から懸念が示された時に，大学としての規定に則った個人情報の保護を理解してもらうよう働きかけ，また町としても条例に則っているかを確認してもらうという内容であった。取り組み開始の時点で上司の了解は得られたと思っていても，その都度問題が派生したときに理解が得られるように対応していた。

３）実施の段階

⑴　データ収集・介入の段階

「職場としてこの研究的取り組みの必要性や意義について意識をもつように学習の機会をつくる」「職場の理解を得るよう外部者の立場を活用して依頼する」のように，職場としての了解は得られていても更なる理解と協力が得られるような支援がされていた。また，「現場で保健師が感じ，考えていることを言語化できるよう支援する」「自発的に意見が出るのを待つ」など保健師自らの考えを，客観的にわかるようにすることを支援していた。「教員もデータ収集を手伝う」場合は，「調査で把握した支援が必要な人について，保健師に報告する」ように，把握のための調査にとどまらず援助につながるよう支援していた。

⑵　整理・分析の段階

「現場にある豊かなデータの意味を見出し，意味を損ねることのないよう状況を確認しながら助言する」「教員も一緒にデータを見ることで，互いに気づきあうプロセスを大事にする」「現場で保健師が感じ，考えていることを言語化できるよう支援する」のように，ここでも実践を十分に言語化した研究となるよう支援していた。また，「保健師自身の十分でない援助プロセスを結果として示された時に，否定はせず，できているところを評価する」のように個人にあわせた支援をしていた。信頼性や妥当性の確保においては様々で「現場にある豊かなデータから，データとして抽出するのが妥当か吟味する」一方，「客観的手法を用いて結果の分析を一緒に行うが，厳密さより保健師自身の活用のしやすさを重視する」ものもあった。「データの信頼性を高めると共に，援助としても重要であることの必要性に気づくようデータを確認する」のように，データの信頼性を高めるデータの記載漏れを確認することにより，看護職の情報として必要な情報であることの気づきを促すこともしていた。

⑶　考察の段階

「文献を用いることで考察が深められるので，文献検索を勧める」のように，計画の段階だけでなく考察の段階では内容を深めるために文献を読むことをすすめ，「結果を丁寧にみていきながらそこから考えられることは何かを保健師と話し合う」「常に目的に立ち戻り，結果の捉え方を確認し，考察を導くよう助言する」のように，論旨の一貫性を担保できるよう支援していた。

⑷　抄録作成・学会・報告書発表の段階

「抄録の書き方について助言する」「人にわかりやすく伝わる内容に修正する」のような実質的な支援があり，また，「組織の中で研究について受けとめられ，共有されるよう心がける」のように，この段階においても，職場の中でのこの取り組みが共有されるよう支援がされていた。学会発表まで行った研究的取り組みでは，「学会発表を通じてリーダーシップが育成されることを見守る」のように，学会発表での発表の様子や参加者の反応を教員も捉え，学会の機会がきっかけとなりリーダーシップが育成されることを期待していた。

４）現場への還元の段階

「研究的取り組みの結果を実践に適用できるように，外部の支援者の立場を利用して内部の人々に働きかける」「研究的取り組みの結果をどのように地域に戻すかを保健師に確認する」のように，教員も取り組み結果の実践への適用に責任を持ち，保健師からは言えないことを，外部の支援者の立場を活かして上位の職にある者への進言をしていた。

５）全体のプロセスを通して

「研究のプロセスを通して，自己効力感や今後の活動への意欲をもてるよう心がける」ことをしていた。また，「保健師の経験や力にあわせて指導にあたる」のよ

表２　保健師の研究的取り組みに対する教員の支援方法

プロセス		カテゴリ	事例
1　開始に至る段階		保健師が推測していること，疑問に思っていることについて，確かめてみることを勧める	C －2，E －1
		先行研究の結果から導かれた活動方法について，意図的に試行することを支持する	E －2
		先行研究の結果から導かれた活動方法について，研究を通して追究することを提案する	F －2
		これまでの支援のノウハウが活かせることを期待し，支援開始を決める	A
		開始の段階で公表を目標において取り組むよう提案する	B
		これまでの保健師との関係を見積もりながら支援方法を考える	F －1
2 計画の段階	実践上の課題から研究課題に転化・明確化	保健師の思いや活動状況を深く知ることをしながら研究として何に焦点をあてるのかを保健師と共に検討する	C －1，D
		実践上の課題があったときにどのような研究アプローチで課題にせまるとよいかを提案する	E －2，F －1
		調査可能な方法を視野にいれながら，研究として何に焦点をあてるのかを保健師と共に検討する	E －1
		研究課題を明確にする上で，文献検討をするようすすめる	C －1
		面接の機会に大学の図書館を利用するよう促す	C －1
		研究のプロセスが自身の活動を評価することになるよう助言する	C －1，C －2
	研究方法の模索と決定	本人の思いや事業の実施状況について深く知ることをしながら，収集（確認）すべきデータは何かを保健師と共に検討する	B，E －2，F －1，F －2
		実現可能で有効な調査方法を助言する	B
		現場にある豊かなデータから，何を結果として示していくか助言する	C －1，D
		保健師個々の課題にあわせて，研究の方向性を見通して助言する	C －1
		保健師にかかる負荷や意欲もふまえ，分析事例数を決定する	D
		現場の保健師の意見を取り入れるプロセスをふめるよう調整する	E －2
	研究意義の明確化	個々の保健師にあわせたやり方で，文献検索や文献検討を支援する	B
	倫理的な配慮	研究の倫理的配慮について事務方上司の理解を得られるよう規定を確認しあう	F －2
3 実施の段階	データ収集・介入の実施	職場としてこの研究的取り組みの必要性や意義について意識をもつよう学習の機会をつくる	A
		職場の協力を得るよう外部者の立場を活用して依頼する	E －2
		現場で保健師が感じ，考えていることを言語化できるよう支援する	A
		安全に発言できる環境をつくる	A
		保健師が感じ考えていることの明確化が，保健師の専門性の気づきになることを促す	A
		自発的に意見が出るのを待つ	A
		教員もデータ収集を手伝う	F －2
		調査で把握した支援が必要な人について，保健師に報告する	F －2
	整理・分析	現場にある豊かなデータの意味を見いだし，意味を損なうことのないよう状況を確認しながら助言する	B，D，E －1
		データの信頼性を高めると共に，援助としても重要であることの必要性に気づくようデータを確認する	F －2
		教員も一緒にデータを見ることで，互いに気づきあうプロセスを大事にする	E －1
		客観的手法を用いて結果の分析を一緒に行うが，厳密さより保健師自身の活用のしやすさを重視する	A
		現場にある豊かなデータから，データとして抽出するのが妥当か吟味する	D
		現場で保健師が感じ，考えていることを言語化できるよう支援する	B，C －1，D
		保健師自身の十分でない援助プロセスを結果として示された時に，否定はせず，できているところを評価する	C －1
	考　　察	結果を丁寧にみていきながらそこから考えられることは何かを保健師と話し合う	C －1
		文献を用いることで考察が深められるので，文献検索を勧める	C －2
		常に目的に立ち戻り，結果の捉え方を確認し，考察を導くよう助言する	C －1
	抄録作成，学会・報告書発表	抄録の書き方について助言する	B，E －1
		学会発表を通じてリーダーシップが育成されることを見守る	B
		組織の中で研究について受けとめられ，共有されるよう心がける	B
		人にわかりやすく伝わる内容に修正する	C －1，E －1
4　現場への還元の段階		研究的取り組みの結果を実践に適用できるように，外部の支援者の立場を利用して内部の人々に働きかける	A
		研究的取り組みの結果をどのように地域に戻すかを保健師に確認する	E －1
5　全体のプロセスを通じて		研究のプロセスを通して，自己効力感や今後の活動への意欲をもてるよう心がける	C －1，D
		計画的に取り組めるよう期日を設ける	C －1
		具体的な提示の仕方をする	A，D
		保健師の経験や力にあわせて指導にあたる	D，E －2
		資源として大学を活用するよう声かける	D
		複数の教員で役割分担して，細やかに，効果的に支援する	D

うに保健師の経験や力量等の個別性を重視して支援していた。

Ⅵ. 考　察

保健師の研究的取り組みが実践上の課題解決となり，ひいては保健師の専門職としての成長にもつながるための看護系大学教員の支援方法の特徴について考察する。

1）実践上の課題解決に向けて，より良い看護実践となることを意識して科学的方法を用い，研究と実践活動の循環を促し，実践の質の向上を導く

開始の段階から，「先行研究の結果から導かれた活動方法について，意図的に試行することを支持する」のように研究から得た知見を実践に適用することを支援し，「先行研究の結果から導かれた活動方法について，研究を通して追究することを提案する」のように研究から得られた知見をさらに発展させることを促していた。研究と実践活動の間に絶えず循環が生まれることにより，知見が蓄積され，実践の質の向上において意義をもつ[21]が，そのために，看護系大学教員は，実践上の課題解決に向けて，科学的方法を用いて，研究と実践活動の循環を促進させる特徴があることを確認した。

また，計画の段階では，「保健師の思いや活動状況を深く知ることをしながら研究として何に焦点をあてるのかを保健師と共に検討する」など，どのような事象を綿密に見ていくのか教員も実践の中から保健師と共に検討し，取り組みのプロセスが，保健師自身の援助の振り返りと評価になるよう支援をしていた。実施の段階では，実践を十分に言語化した研究となるよう支援し，データの信頼性を高めるためにデータの記載漏れ内容を確認することにより，看護職の情報として必要な情報であることの気づきを促すことをしていた。このように，科学的方法を用いる際には，より良い看護実践となることを意識することにより，実践の質の向上を導く支援の特徴があることを新たな知見として確認した。

このことは，より良い看護実践となるようこれまでの実践の検証をし，新たな実践の開発や能力を向上するという意味で専門職としての成長につながると考えた。

2）現場にある豊かなデータを言語化し，その意味を見出せるよう検討を深める

研究方法の模索と決定の段階で，「本人の思いや事業の実施状況について深く知ることをしながら，収集（確認）すべきデータは何かを保健師と共に検討する」，「現場にある豊かなデータから，何を結果として示していくか助言する」等していた。また，整理・分析の段階においても，現場にある豊かなデータを活かした研究となるよう支援していた。これらから，教員も保健師の活動状況やその背景を知ることをしながら，保健師の思い・考えを言語化することを促し，現場にある豊かなデータの意味を見出す支援をするという特徴があると考えた。

看護の変革・質の向上に向けた看護実践上の研究課題を見出す方法として，実践者かつ研究者の所属組織の現状を理解し，看護活動やデータ分析過程を客観的・批判的に捉えることが可能な指導教員との討議が報告されており[22]，本研究においても，同様の方法が研究の全プロセスにおいて確認できた。教員の資質として，保健師の活動や分析過程を客観的・批判的に捉える能力をもつことが重要であろう。

3）保健師の個別性を重視する

開始に至る段階で，「これまでの保健師との関係を見積もりながら支援方法を考える」，全プロセスを通して「保健師の経験や力にあわせて指導にあたる」など，保健師の経験や力量，意欲，負担を考慮した個別性を重視して支援するという特徴があった。

上述した考察1）2）を促す上でも，保健師が積んできたこれまでの実践経験，研究の経験を捉え，それにあわせる必要があり，保健師の個別性を重視する支援方法は，研究的取り組みを行う上で教員がもつべき基本的な姿勢と考えられた。

4）取り組みのプロセスを通じて，外部支援者のメリットを活かし職場の協力を求め，取り組みの共有化を図る

本研究の研究的取り組み事例は，職場の了解があって開始されたものだった。しかし，それは上司の了解であるなど，必ずしも職場や業務担当者全員の了解があるわけではなかった。例えば，倫理的配慮の確認の段階で，更なる職場の理解と協力を得られるよう支援していた。また，現場への還元の段階でも「研究的取り組みの結果を実践に適用できるように，外部の支援者の立場を利用して内部の人々に働きかける」のように，職場の協力を求めることは不可欠であった。

実践の場で研究を推進するには，先輩や上司の支援が重要である。例えば，研究を進めやすい環境づくり[23]や，部下の人材育成の一端となるような師長の関わりの重要性[24]が述べられている。

また，看護の変革・質の向上に向けた看護実践上の研究課題を見出す方法として，導いた研究課題について師長を含む看護スタッフから賛同を得たことが研究課題の妥当性を保証する上で有用であったと述べられている[25]。

これらから，実践上の課題解決となる研究的取り組みとなるには，取り組みのプロセスを通じて，外部支援者のメリットを活かし職場の協力を求め，取り組みの共有

化を図るという特徴があると考えられた。それは，現場で研究を推進する上で基本的に大事なことであり，研究課題の妥当性の保証としても意味あることが確認できた。

５）科学的方法の質を保証する

開始に至る段階から「保健師が推測していること，疑問に思っていることを，確かめてみることを勧める」，実践上の課題から研究課題に転化・明確化の段階で，「実践上の課題があったときにどのような研究アプローチで課題にせまるとよいかを提案する」，「研究課題を明確にする上で，文献検討をするようすすめる」ことをしていた。また，整理・分析の段階では，「現場にある豊かなデータから，データとして抽出するのが妥当か吟味する」，考察の段階では「常に目的に立ち戻りつつ結果の捉え方を確認し，考察を導くよう助言する」等していた。このように事実を検証していく姿勢を支え，データの妥当性や確からしさ，客観性，論旨の一貫性が保証されるように支援する特徴があった。そのために，全プロセスを通して資源としての大学の活用を促していた。

研究方法の模索と決定の段階で「保健師にかかる負荷や意欲もふまえ，分析事例数を決定する」こともあった。不確実性の高い状況で，保健師の個別性を重視し，かつ科学的方法としての質を保証することは，教員の研究能力が問われる点でもあった。

Ⅶ．本研究の意義と限界

本研究の意義は，実践上の課題解決に向けた保健師の研究的取り組みに対する看護系大学教員の支援方法を研究のプロセスにそって明確にした点である。

しかし，研究の推進には研究プロセスにあわせた研究支援体制も重要[26]であるため，今後は，研究支援体制の構築のための支援方法を明らかにする必要がある。

なお，本研究は，平成22－24年度科学研究費補助金（22592557）によるものである。

謝辞：調査に快くご協力いただいた看護系大学教員の皆様に厚くお礼申し上げます。

引用文献

１）厚生労働省健康局長通知：地域保健対策の推進に関する基本的な指針の一部改正について，http: //www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Simple/961/648/kunituuti.pdf, 2013. 10. 22.
２）厚生労働省健康局長通知：地域における保健師の保健活動について，保健衛生ニュース，第1707－1号，2－9，2013.
３）厚生労働省：新人看護職員研修ガイドライン－保健師編，http: //www.mhlw.go.jp/bunya/iryou/oshirase/dl/130308-3.pdf, 2013. 10. 22.
４）永江尚美：中堅期保健師の人材育成に関するガイドラインおよび中堅期保健師の人材育成に関する調査報告書，平成23年度地域保健総合推進事業，日本公衆衛生協会．http: //www.nacphn.jp/dl_file/tyosahoukoku_h23-2.pdf, 2013, 10, 22.
５）石丸美奈，岩村龍子，大川眞智子：看護系大学教員と行政保健師との共同研究を通した利点と協働の方法，日本地域看護学会誌，14(1)，55－61，2011.
６）ナンシー・バーンズ，スーザン・K・グローブ：看護研究入門―実施・評価・活用―（黒田，中木，小田，逸見訳），第１版，エルゼビア・ジャパン，2007.
７）坂下玲子，西平倫子，西谷美保：臨床看護師が取り組む看護研究の実態，看護研究，45(7)，638－642，2012.
８）同上６）
９）南　裕子，看護における研究，第１版，日本看護協会出版会，2008.
10）Margaret Ogier: Reading Research 2nd ed, Bailliere Tindall, 2002.
11）David coghlan, Mary Casey: Action research from the inside: issue and challenges in doing action research in your own hospital, Journal of Advanced Nursing, 35(5), 674－682, 2001.
12）Isabel Higgins, Vicki Parker, Diana Keatinge, Michelle Giles, Rhonda Winskill, Eileen Guest, Elizabeth Kepreotes, Caroline Phelan: Doing clinical research: The challenges and benefits, Comtempolary Nurse, 35(2), 171－181, 2010.
13）宮﨑美砂子：最新地域看護学（宮﨑美砂子他編），第２版，日本看護協会出版会，2013.
14）宇多絵里香：臨床看護研究に関する文献検討，看護研究，45(7)，630－637，2012.
15）同上14）
16）同上14）
17）石丸美奈，上田修代，岩瀬靖子，飯野理恵，宮﨑美砂子，佐藤紀子，細谷紀子：「A県保健活動業務研究」の成果と課題―保健師就業年数群別の特徴，日本地域看護学会第16回学術集会講演集，68，2013.
18）杉田由加里，松下光子，石丸美奈，石川麻依，井出成美，緒方泰子：保健所保健師の業務研究に関する実態と促進要因，日本地域看護学会第16回学術集会講演集，56，2013.
19）宮﨑美砂子：最新保健学講座１　地域看護学概論（金川克子編），第２版，メヂカルフレンド社，2008.
20）D. F. ポーリット & C. T. ベック：看護研究原理と方法（近藤潤子監訳），第２版，医学書院，2010.
21）同上19）
22）河原畑尚美，小野幸子：看護の変革・質の向上にむけた看護実践上の研究課題を見出す方法について，日本看護学会論文集：看護管理，36，350－352，2006.
23）操　華子：臨床看護研究の道しるべ，看護，57(6)，87－92，2005.
24）金井Pak雅子：臨床看護研究促進に必要な視座・サポート，55(12)，44－47，2003.
25）同上22）
26）酒井郁子：看護研究を“育てる”ための管理者の視点，看護展望，35(12)，4－9，2010.

NURSING FACULTY MEMBERS' METHODS FOR SUPPORTING PRACTICE-BASED RESEARCH THAT AIMS TO SOLVE PRACTICAL PROBLEMS ENCOUNTERED BY PUBLIC HEALTH NURSES

Mina Ishimaru*, Kieko Yasuda*2, Yoko Yamazaki*3, Chieko Ide*4

* : Chiba University, Graduate School of Nursing

*2: Nagano College of Nursing

*3: Yamanashi University, School of Nursing

*4: Oita University, School of Nursing

KEY WORDS :

Research Support, Nursing Faculty, Practice-Based Research

This study investigated nursing faculty members' methods for supporting practice-based research that aims to solve practical problems encountered by public health nurses (PHNs).

Nine nursing school faculty members involved in practice-based research by PHNs participated in semi-structured interviews on their activities and professional development. Nine cases from six faculty members were qualitatively analyzed.

Fifty categories were extracted from several four-step processes of support as well as the process of support as a whole. The earliest stage examined "suggestions for PHNs to confirm facts." The planning stage examined "PHNs' understanding of their activities and consideration of measures that focus on the research theme." The action stage examined "the creation of opportunities to learn about practice-based research." The feedback stage examined "the facilitation of PHNs' application of results to practice from the perspective of an outside supporter." Finally, all processes as a whole examined "the maintenance of motivation during activities throughout all processes."

The results revealed the following methods for supporting practice-based research: 1) adapting scientific methods with the awareness of improving practice in order to promote repetition between research and practice that aims to solve practical problems encountered by PHNs and improve the quality of public health nursing practices, 2) making verbalizations and identifying their meaning based on the rich data and through discussions, 3) coping with the individual nature of each PHN, 4) developing cooperation and sharing knowledge in the workplace as a form of support, and 5) guaranteeing the quality of the scientific methods used in practice-based research.